言語科学研究：神田外語大学大学院紀要　第1号，1995年

自然現象を表す機能動詞文と連体・連用の対応（前編）

奥津敬一郎

Natural Phenomena Sentences and Adnominal-Adverbial Correspondence in Japanese I

Keiichiro Okutsu

「冷たい雨が降る」「雨が冷たく降る」において、前者の「冷たい」は連体成分、後者の「冷たく」は連用成分であるが、両者は同義的である。このような関係を連体・連用の対応と呼ぶ。この対応には一定の条件があり、そのひとつが「雨が降る」のような自然現象を表す機能動詞文である。この前編ではまず自然現象文とは何かをいささか詳しく考察し、後編において連体・連用の対応を論ずる。

【キーワード】　自然現象文、機能動詞文、連体、連用

1．はじめに

奥津（1993）「名詞句からの移動と文法関係」は、名詞句の中のある要素、特に連体成分の名詞句からの移動について、奥津がそれまで研究した4つの現象をまとめ、それらに共通の条件があることと、それぞれに特殊な条件があることを述べたものである。その中の一つが奥津（1983）において「形容詞移動」と名付けたものである。

（1）a　急流が　白い泡を　噛んで流れる。
　　 b　急流が　泡を　白く　噛んで流れる。

aの「白い泡」はもちろん名詞句だが、その中の主名詞「泡」を連体修飾している形容詞「白い」が、bでは「白く」のように連用形となり、副詞として動詞を修飾している形になっている。このようにaとbは統語的な形は異なっている

のだが、しかし同じ事柄を表現していると思われる。この同義性を説明するために形容詞移動と言う一種の変形操作を提案した。つまりａの「白い泡」という名詞句から形容詞の「白い」が移動してｂになると考えたのである。

しかし無条件で形容詞移動ができるわけではない。次の例がそれである。

(2) a　黒い犬が　白い犬を　噛んだ。
　　b ＊黒い犬が　犬を　白く　噛んだ。

(3) a　花子は　白い靴を　買った。
　　b ＊花子は　靴を　白く　買った。

とすると、形容詞移動が可能な条件は何か、を探らなければならないということになる。そのひとつが「変化動詞文における<結果>を表す名詞句が、主語または目的語である場合」というのであった。例えば次のようである。

(4) a　ズボンに　大きい穴が　あいた。
　　b　ズボンに　穴が　大きく　あいた。

「穴があく」というのは「穴」の発生を表す変化動詞文である。「穴」はこの場合 <結果> を表す名詞で、かつ主語として働いており、「大きい」という形容詞が移動できる。

(5) a　あの店は　ころもだけ大きいてんぷらを　あげる。
　　b　あの店は　てんぷらを　ころもだけ大きく　あげる。

上例の「あげる」は変化他動詞で「てんぷら」は「あげる」動作の<結果>であり、かつ目的語である。この場合は単語としての形容詞でなく「ころもだけ大きい」という形容詞文が移動している。なお「形容詞移動」とは称したが、奥津(1983) では次の例文も挙げた。

(6) a　あの寿司屋は　わさびをきかせたすしを　にぎる。
　　b　あの寿司屋は　わさびをきかせて　すしを　にぎる。

この例の連体成分の「わさびをきかせた」は動詞文である。そこで「形容詞移動」と呼ぶより、今後はより一般的な「連体移動」と呼ぶことにする。

しかし (1) に戻って、ａの「白い泡を噛む」は変化動詞文とは言えないのではないか。とすると連体移動可能の条件は他にもあるということになる。それが何かを探るのが当時からの宿題であった。小論はその宿題の解決の一つである。

2. 機能動詞文と連体・連用

(7) a　冷たい雨が　降っている。

b　雨が　冷たく　降っている。

上例のaとbは同義的であろう。aの名詞句「冷たい雨」の連体成分「冷たい」が、bでは「冷たく」と副詞として働いている。「雨が降る」という表現を自然現象の発生を表す変化動詞文と考え、発生した＜結果＞としての「雨」が主語であるから連体移動が可能であるという解釈の可能性もある。しかし「降る」自体が変化動詞とは言いにくい。むしろ「雨」が動詞的意味を持ち、それの＜様態＞を示す連体成分が連用化したものと考えたいのである。

鈴木（1979）も同様な例を挙げ興味ある観察をしている。例えば

(8)　朝、冷たい霧雨が降っていた。（→冷たく）（p.322）

においては、「冷たい」という連体成分（鈴木のいう「規定語」）は、それに対応する（連用）修飾語におきかえることができるとしている。つまり連体移動である。

上のほか鈴木は多くの例をあげ、次のように述べている。

(9)「文全体が、あたらしく生じた現象を意味していて、その現象にともなって、主語で示されるものが、主語をかざる規定語でしめされるような状態をとるというようなばあい、主語をかざる規定語は、それに対応する修飾語におきかえることができる。」（p.322）

矢沢（1993）はこの鈴木さらに奥津を批判し、連体移動の現象を彼なりに体系化したものである。矢沢については後編で触れたいと思っている。

村木（1991）『日本語動詞の諸相』と題する書物の「第3部　形式動詞とその周辺」の「1 機能動詞の記述的研究」には更に興味ある記述がある。

村木は「研究する」「動揺する」などのいわゆる漢語サ変動詞の後項「する」を「機能動詞」と呼ぶ。この「機能動詞」とは次のように定義される。

(10)「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞」（p.203）

それだけなら従来の指摘とあまり違いはないようだが、村木のいう機能動詞は「する」だけでなく、「研究する」に対して「（研究を）おこなう」、「動揺す

る」に対して「（動揺を）おこす」、「メモする」に対して「（メモを）とる」のような「おこなう」「おこす」「とる」など、多くの動詞を機能動詞と認めており、これらについてのきわめて詳細な記述がなされている。このように機能動詞を拡大すると、どこまでが機能動詞であるかのが問題になるだろうが、ともあれ村木の機能動詞論は注目に値する研究である。

ただし村木の研究は、それが主題でないのだから当然であるが、機能動詞文における連体・連用の関係についてはほとんど触れていない。

これについてはまず小林（1986）がある。これは奥津（1983）が変化動詞文について連体移動の存在を指摘したのに対し、機能動詞文にも連体移動の存在することを指摘したものである。小林は次のような例をあげている。

(11) a　高校野球では　毎日　はげしい練習を　する。
　　 b　高校野球では　毎日　練習を　はげしく　する。
(12) a　太郎は　熱心な研究を　する。
　　 b　太郎は　研究を　熱心に　する。
(13) a　ひどい頭痛が　する。
　　 b　頭痛が　ひどく　する。

上に「機能動詞文」という用語を使ったが、上例のように機能動詞を使った文を指す。また実質的な動詞の意味を担う「練習」「研究」「頭痛」などを「動名詞」と呼ぶことにする。機能動詞文における動名詞と機能動詞との関係は「研究する」のように動名詞と機能動詞とが融合して一つの動詞として働くものと、「練習をする」「研究をする」「頭痛がする」のように動名詞と機能動詞が分離し、動名詞に格助詞の「を」や「が」のついたものとがある。機能動詞文としては両者とも基本的には同じ意味・機能を果たすが、前者を「非分離形」後者を「分離形」と呼ぶことにする。

機能動詞文の統語的・意味的性格、分離形と非分離形の関係、どちらを基本形とし、どちらを派生形とするか、などについてはKuroda（1965）をはじめとして、井上（1976）影山（1980）影山（1993）その他の研究があるが、これについては別稿にゆずる。

また動名詞として多いのは「を」格をとるもので、「が」格をとるものはきわめて少ない。そしてこの場合は原則として分離形のみである。また「を」格をと

る動名詞について、分離形を許さないものがあることを主題とする田野村（1988）、平尾（1990）のような研究もある。

（14）a　ひどい頭痛が　する。
　　b　＊ひどい頭痛　する。
　　c　＊ひどく　頭痛する。

上例のように「頭痛する」という非分離形は非文となる。この点から見れば、非分離形よりも分離形を基本形とするという影山（1980）影山（1993）の主張の方が妥当であると言えよう。

連体と連用の対応についていえば、連体成分は分離形の場合にのみ可能であり、非分離形では不可能である。一方連用成分は分離形・非分離形いずれも可能である。上の（11）（12）（13）は分離形であるから連体も連用も可能で、そこで連体移動が主張されるのである。しかし非分離形では連用は可能であっても連体は不可能であるから、むしろ連用成分を基本とし、それが連体成分になると考える方がいいかもしれない。これについては更に考えるべき点があるようだから、小論ではどちらかに決めず、以下「連体・連用の対応」ということにしておく。

さて（11）（12）（13）のように機能動詞文の場合、なぜ連体と連用とが対応するのか？

動名詞は品詞論的には確かに名詞であるが、意味的にはもちろん通常の動詞と同じく、主としてもののウゴキを表す。また統語論的にも、分離形・非分離形いずれにせよ、機能動詞と結びついて、通常の動詞と同じく主語・目的語など種々な格をとり文を構成するのが主たる働きである。したがって動名詞につく連体成分も本来は動詞的意味を修飾するものであるはずである。そして非分離形の場合はすでに一つの動詞であるから、それを修飾するには連体では不可能で、連用成分でなければならない。また分離形の場合も名詞としては連体成分がとれるが、機能動詞文の中では動詞として働くので、それを修飾する連用成分がとれるのである。そこで連体と連用との対応が可能となる。

例えば（11）でいえば「はげしい練習」の「はげしい」という連体成分は、動名詞「練習」の意味するウゴキの＜様態＞を示すもので、それが「練習（を）する」という動詞として働く場合は、様態副詞の「はげしく」をとることになる。こうして機能動詞文の場合、連体と連用とは対応することになるのである。

小論ではこのような機能動詞文のうち、「研究をする」「練習をする」など動名詞が「を」をとるものはとりあげず、「頭痛がする」のように動名詞が「が」を取る機能動詞文について連体・連用の対応を考察する。なお前者については改めて述べることにする。

3. 自然現象文

（15）雨が　降る。

というような自然現象の発生を表す文を機能動詞文としたのは村木（1991）である。つまり「降る」のような動詞を機能動詞としたのである。すると動名詞は「雨」ということになる。

（16）空から小判が降ってきた。

のような場合の「降る」はもちろん通常の動詞であるが、「雨が降る」の場合は「雨」というものがまずあって、それが「降る」というのではなく、「雨降り」という1語で表すような現象の発生を表すのではないか。「雨」はたしかに「する」のような代表的な機能動詞をとって「＊雨する」「＊雨をする」「＊雨がする」などとは言えないし、「＊雨る」のような動詞もないが、「雨」は一種の現象の表現であり、ウゴキの表現であるとも言える。

（17）稲光が　する。

（18）夕焼けが　する。

などは、ほとんど無意味の機能動詞「する」がついて自然現象の発生を表す。「光る／光り」「焼ける／焼け」は動詞と名詞との対応があるが、「稲光」「夕焼け」に対しては「＊稲光る」「＊夕焼ける」という動詞はないから、動詞から派生した名詞とはいえない。しかし「する」と結びついた（17）（18）は機能動詞文と考えられるから、「稲光」「夕焼け」は動名詞としてよかろう。とすると同じく自然現象を表す「雨」も動名詞と考えてよかろう。そして「雨が降る」を機能動詞文とする村木の解釈も妥当なものであろう。自然現象の表現は多くの場合このような機能動詞文であるが、以下自然現象を表す機能動詞文を「自然現象文」と呼ぶことにする。

村木は、英語の It rains. ドイツ語の Es regnet. フランス語の Il pleut. の例をあげ、動詞が実質的な意味を担い、主語の3人称単数代名詞はいわゆる形式主語であ

ること、それに対して日本語は動名詞を中心とした表現であることに、対照言語学的な興味を感じている。

中国語の“下雨”についても村木は触れているが、これを「動詞＋名詞」という構造とすれば、「主語＋述語」という中国語の通常の構造とは語順が逆になるし、“下雨”を1語の動詞と解釈する可能性もある。この解釈をとれば“下雨”は主語のない動詞だけの文となる。

もう一つスペイン語では、名詞の「雨」は lluvia, 動詞の「雨が降る」は llover で、文としては Llueve. であるという。スペイン語では動詞の形が主語の人称・数と一致するので、主語の人称代名詞は省略されることが多いが、自然現象文の場合は、本来主語をとらないいわゆる単人称動詞（verbos unipersonales）であり、動詞は3人称単数の形しかない。通常の動詞はやはり主語があり、それが省略されるのだが、星野起美（神田外語大学大学院生）によれば、自然現象文では、中性的な3人称単数代名詞 eso でも主語として使えないと言う。3人称単数形しかないから、主語が省略されると言ってもいいかもしれないが、本来主語がないので、最も無標の3人称単数形が使われると解釈する方がいいのではないか。この単人称動詞には llover の他に lloviznar（小雨が降る）、nevar（雪が降る）、tronar（雷が鳴る）、ventear（風が吹く）、escarchar（霜がおりる）などがあるが、このそれぞれに対応する日本語も興味深い。

以上のように見てくると、自然現象の発生を表す文は、種々な言語で共通する点がある。我々をとりまいて生じる自然現象というものは、「何が　どうする」というような主語・述語に分割して表現されるものではなく、主客未分の、あるいは主語のない述語だけの現象なのではないか。ただそれがそれぞれの言語の統語的制約に従って、「主語＋述語」と言う形式だけは整えるのではないか。この場合欧米の言語では主語が形式化し、述語としての動詞が実質的な意味を持つ。他方日本語では動詞は機能動詞として形式化し、動名詞が主語として実質的な意味を持つと言える。しかしその動名詞も品詞論的に名詞であるだけであって、実質的には動詞なのである。こうしてみると自然現象文は言語の違いを越えて、共通点を持つことになる。つまり自然現象文は、実質的には、主語のない動詞だけの文であり、我々言語主体は、我々をとりまく自然界の諸現象を、そのようなものとして認知しているのである。なお朝鮮語の場合は日本語に似ているようであ

るが、詳しい考察は後日のこととしたい。

以上のことを更に具体的な例で裏付けてみよう。

国立国語研究所（1964）『分類語彙表』の「2.用の類」には「自然現象」の項があり、多くの動詞をあげている。その中から適宜動詞を拾い上げてみる。

まず気象に関するものである。「雨が降る」はすでにあげたが、「雪」「霰」「みぞれ」などについても「降る」が機能動詞であり、自然現象文を作る。「雨」は本来「降る」ものであり、「雪」「霰」「みぞれ」なども本来「降る」ものなのである。

(19) 風が　吹く。

「風」は本来「吹く」ものなのであるが、「秋風」「朝風」「木枯らし」「追い風」「向かい風」なども「吹く」ものである。古語では「嵐」も「吹く」ものであったが、風に関する気象現象を表す機能動詞は「吹く」なのである。

代表的な機能動詞「する」をとるものとしては「稲光がする」「夕焼けがする」をすでにあげたが、もうひとつあげておく。

(20) 底冷えが　する。

「冷える」が本来動詞でその連用形「冷え」は動名詞たるべきものだが、単独では使われず、「底冷え」のような複合動名詞として使われる。「底から冷える」のような意味を複合動名詞化し「する」を使って同義的な機能動詞文としたものであろう。

「雨」もそうだが水分に関する気象現象としては、すでにあげた「雪が降る」「霰が降る」とともに「霧」「霞」「雲」「露」「霜」などがあり、これらの漢字が雨冠であるのもおもしろい。ただし機能動詞はそれぞれ違う。「霧」「霞」は古い表現ではあるが「霧立つ」「霞立つ」のように「立つ」が使われた。「雲」も「八雲立つ」のような表現があった。さらに「霧」は古語においては動詞でもあった。たとえば人麻呂の長歌に。

(21) ・・・霞立ち　春日の霧れる（春日之霧流）ももしきの　大宮處　見れば悲しも（万29）（以下岩波『日本古典文学大系』による）

があり、また磐姫の歌に

(22) 秋の田の穂の上に霧らふ（穂上尓霧相）朝霞何處邊の方にわが戀ひ止まむ（万88）

などがある。つまり名詞の「霧」は4段動詞の「霧る」から派生した動名詞と考えられる。「霧らふ」はそのいわゆる延言である。しかし「霧」が一度名詞として機能を始めると、更に機能動詞の「立つ」を使って自らを動詞的に働かせるのである。「霧立ちのぼる秋の夕暮れ」は有名な歌だが、万葉集には次のようなものがある。

(23) 天の河霧立ち上る（霧立上）織女の雲の衣の飄る袖かも（万2063）

「霞」は「霞む」からの派生名詞であろうが、更に機能動詞をとって上の人麻呂の歌のように「霞立つ」となったのであろう。

「陽炎（かげろう）」も気象現象の一つであろうが、これには動詞の「かげろう」もあるが、現代語では動詞としては使われないだろう。やはり

(24) 東の方に　陽炎が　立っている。

のように「立つ」を使って機能動詞文とする。古語においては「かぎろひ」の形もあった。人麻呂の

(25) 東の野に炎の立つ見えて(東野炎立所見而)かへり見すれば月傾きぬ（万48)

は「かぎろひ」と訓ませている。「かぎろふ」という動詞もあったそうだが、動詞から名詞が派生したのか、名詞から動詞が派生したのか、諸説あってよく分からない。いずれにしろ「陽炎」が名詞であっても、「立つ」とともに自然現象文を構成することは間違いない。

「雲」が動詞から派生したものかどうかは知らないが、古語では「八雲立つ」のように機能動詞として「立つ」が使われた。

(26) この大神、初め須賀の宮作らしし時に、其地より雲立ち騰りき。かれ、御歌よみしたまひき。其の歌は、
八雲立つ（夜久毛多都）　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る　その八重垣を（記歌謡1）

同時に「雲」の発生を表す自然現象文では「出る」も機能動詞として働く。「八雲立つ出雲」の「出雲」が、「雲」は「出る」ものであることを暗示している。「いづも」という地名を「雲出づるところ」と古代人が解釈した故にあてた漢字であろう。「出る」は、まず内から外への移動を表す移動動詞であろうが、転じて事柄の発生・出現の意味に使われることも多く、機能動詞としても働くようである。

「露」「霜」は「露がおりる」「霜がおりる」など「おりる」が機能動詞であろう。また「（霜）置く」が古語においては機能動詞でもあった。

「雷」もおもしろい。「神鳴り」の意と言われるが、とすればもとは「神が鳴る」という動詞文が複合名詞化したわけである。「雷」の存在は耳に聞こえるすさまじい音からのみ認知できる自然現象であるが、古代人はそれを神の仕業に仕立てたのであろう。その「かみなり」が1語化し動名詞化して「雷」になると、機能動詞の「鳴る」を使って「雷が鳴る」とリダンダントな表現をとるようになる。さらにそれが「雷鳴」として1語化し動名詞化すると、再び機能動詞「する」を使って「雷鳴がする」という2重にリダンダントな文となる。こうして「雷」という自然現象は

(27) a　神が　鳴る。→雷

b　雷が　鳴る。→雷鳴

c　雷鳴が　する。

という3つの自然現象文をもつことになる。

「地震」「雪崩」「山崩れ」などの自然現象は発生動詞の「起きる」「起こる」が使われ「地震が起きる」「山崩れが起きる」などとなる。「地震」はもちろん「震」という動詞があるし、「山崩れ」は「崩れる」を含む複合動名詞であるし、「雪崩」には「なだれる」という動詞がある。

海では「波が立つ」し「しぶきがあがる」のである。

「火」は「燃える」ものであり、「炎」は「あがる」または「立つ」ものである。これらも広い意味での自然現象文を作る。

(28) a　火が　燃えている。

b　家が　燃えている。

上例のaとbを比べれば、aの「燃える」は機能動詞で、bの「燃える」は非機能動詞であることが理解できよう。「火」は本来「燃える」ものであるが、「家」は本来「燃える」ものではない。

音に関しては多くの場合「する」がつかわれる。「音がする」「響きがする」「地響きがする」「海鳴りがする」など、その他「雑音」「物音」「足音」「靴音」「銃声」「爆音」「雷鳴」なども「する」がつく。音の発生源が認知できれば、それを次のように表現できる。

(29) a　隣の部屋で　太郎の声がした。

　b　外の通りで　暴走族のバイクの騒音が　する。

そもそも「地響き」「海鳴り」「靴音」「銃声」などは「地」「海」」「靴」「銃」などすでに音源を動名詞に組み込んでいるのである。

さらにその音源を主語として他動詞の機能動詞文ができる。この場合「立つ」の他動詞形である「立てる」などが機能動詞となる。村木の言う「使役機能動詞」である。ただし「＊音が立つ」「＊騒音が立つ」など自動詞文は非文である。

(30) 暴走族が　騒音をたてる。

(31) 音をたてずに歩け。

(32) 戦車が　唸りをあげて　ばく進する。

心理現象や生理現象も広い意味での自然現象文と言えよう。「寒気がする」「悪寒がする」「頭痛がする」「吐き気がする」「めまいがする」「息切れがする」など「する」のつくものがある。しかしこれらは現象の主体が存在する。

(33) 太郎は　頭痛がする。

(34) 花子は　めまいがする。

いわば2重主語構文であるが、いわゆる不可分離所有構造で、身体部分とその所有者とが、統語上は分離して表現される現象である。つまり気象現象などと違って、心理現象はその主体が認知可能であり、それを主語として表現できるのである。従って次のように自動詞文よりもむしろ他動詞的な機能動詞文を作ることが多い。

(35) 太郎はやっと息をしている／＊息がしている。

(36) 花子はしきりにくしゃみをする／＊くしゃみがする。

(37) 太郎は足にやけどをした／＊やけどがした。

その他「いびきをかく」「あくびをする」「けがをする」「骨折（を）する」などがある。

4. まとめ

以上自然現象文について考察してきたが、まとめると次のようになる。

(38) a　統語的には「動名詞　が　＋　機能動詞」の形をとる。

　b　主語の動名詞は自然現象を表す。

c　機能動詞がその動名詞について自然現象の発生を表す自然現象文を作る。

d　機能動詞としては「する」「立つ」「起きる」「降る」「吹く」「出る」「ある」などがある。

e　統語的な形の上では主語・述語の整った文であるが、意味的には主語と述語とが統合して動詞として働き、意味上の主語はないと考えられる。

さらに冒頭にあげた連体・連用の対応について述べなければならないのだが、本紀要の規定による枚数に近くなったので、後編にゆずることにする。後編は神田外語大学言語教育研究所の紀要に発表する予定である。

文献

井上　和子（1976）『変形文法と日本語　上』大修館

奥津敬一郎（1969）「数量的表現の文法」『日本語教育』14

〃　（1983）「変化動詞文における形容詞移動」渡辺実編『副用語の研究』明治書院

〃　（1985）「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』22

〃　（1993）「名詞句からの移動と文法関係」『神田外語大学紀要』第5号

影山　太郎（1980）『日英比較　語彙の構造』松柏社

〃　（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

国立国語研究所（1964）『分類語彙表』秀英出版

小林　茂之（1986）『連体成分移動の研究』東京都立大学修士論文

鈴木　康之（1979）「規定語と他の文の成分との移行関係」『言語の研究』むぎ書房

田野村忠温（1988）「「部屋を掃除する」と「部屋の掃除をする」」

平尾　得子（1990）「サ変動詞をめぐって」『待兼山論叢』第24号　日本学篇

村木新次郎（1980）「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国立国語研究所報告43』

〃　（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

中北美千子（1991）『「補足成分＋形式動詞『する』」について――副詞、形容（動）詞を補足成分とする場合』日本女子大学修士論文

宮城　昇（1986）『基礎スペイン語文法』白水社

矢沢　真人（1993）「いわゆる「形容詞移動」について」『小松秀雄博士退官記念日本語論集』三省堂

Grimshaw J. & A. Mester (1988) Light Verbs and θ-Marking, *Linguistic Inquiry 19, 205-232*

Kuroda, S-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D dissertation, MIT.